

No.4

東京文化資源会議

「ティーチャ」

T-Cha

東京文化資源
会議

Tokyo Cultural Heritage Alliance

ニューズレター

@Ueno Square Plan

NAOTO
NAKAJIMA

KIICHIRO
DOMYO

KAZUYA
SATO

RYUJI
FUJIMURA



生活圏と 開放系文化資源で 都市を捉え直す 「上野スクエア 構想」

東京文化資源区構想において重要な場所として挙げられたのは「上野」でした。半径3キロ圏内の中心に位置し、博物館群や東京藝術大学、上野公園や不忍池といった文化資源が集まるエリアでもあります。また上野は文京区や台東区、千代田区の区境に位置しており、「文化資源区」という区境を越えた東京のこれからを考える重要な地域でもあります。

「美術館や博物館などの芸術文化資源だけでなく、まちなかの文化をテーマに上野の文化資源を再発掘することが大切だと考え、大学の研究室とも連動して調査研究を行うことにした」と話すのは、上野スクエア構想検討委員会の座長であり東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻の中島直人さん。東大都市デザイン研究室メンバーを中心に、上野の地元の方々や上野で商売を長年営んでいる方々、東京藝術大学の方々など分野横断的に提案できるメンバーを委

員としながら、上野スクエア構想はこれまで調査・議論を進めてきました。

生活圏としての 上野の街を捉え直す

でいた人たちも、戦後復興や高度経済成長とともに職住分離になっていき、上野に住む人が少なくなってきた。まちづくりを考える上で、

住む人の意見、住環境とき

まちなか文化の中心である上野の魅力をいかに発信していくか。はじめに、不忍池、上野広小路、湯島、アメ横、御徒町一帯を対象に、地域の豊かな文化資源が連携したエリアビジョンを検討してきました。調査を進めるうちに、上野のまちが持っている文化資源として「自然軸」「空間軸」「生活軸」の3つの観点が見えてきました。自然軸では地形や緑地、池まわりに関する調査、空間軸では土地利用や街路形成の変遷についての調査、生活軸では諸施設や交通あるいは文学や雑誌記事における上野の描かれ方を調査しました。寛永寺の創立、大火後の広小路の形成、上野公園の整備、震災後の土地区画整理事業など、社会の変遷とともに上野は大きな転換点を迎えてきました。そのなかでも「生活軸」における住環境、住生活のあり方がこれからの上野を考える大きなポイントだ

という議論がでてきました。

「かつては一階で商売をし、二階に暮らす」という職住一体で生活を営ん



ちづくりを考えると、戦後復興や高度経済成長とともに職住分離になっていき、上野に住む人が少なくなってきた。まちづくりを考えると、

住む人の意見、住環境とき

ちんと向き合うことが大切だと考えている。そう話すのは、上野のまちづくりに長年携わってきた副都心上野まちづくり協議会の佐藤一也さん。建築家で東京藝術大学美術学部建築科准教授の藤村龍至さんは「上野を生活圏として捉え直す、生活の場がこれからのコンセプトかもしれない」と話します。「近年、都心回帰が起きているが、上野に縁のある人以外には上野に住宅地としてのイメージは少ない。しかし、東京藝術大学に通い、事務所や自宅を上野で過ごすなかで感じるのは、上野は豊かなパブリックスペースがあるというところ。街中の繁華街や不忍池でジョギングや散歩など回遊する人も多い。上野を生活圏として再定義すること

とできれば、新たなアーバンデザインを組み込むことができるはず」

まちの文化資源を継承し、

まちを自分たち事として向き合いながらこれから考えていくために、住環境としての上野の価値を再発掘していくことの可能性が次第に見えてきました。

開放系の文化資源で 上野のまちを再定義する

文化資源区は文化を横断的に体験することの価値を提供すること、つまりいかに横につながりながら都市空間を楽しむか。地元で商売を営む株式会社道明代表取締役の道明葵一郎さんは「繁華街化が進み、飲食店などが増えてきたなか、

街の安心安全や上野らしさをどのように築くべきかを地元の方々も危機意識を持っている。上野を全体的に見るとコンパクトな中に多様な要素が詰まっており、一日中楽しむことができる。街全体をテーマパークのような回遊性の高いものにいかに変えていくか。不忍池と仲町通りを含めた街との接点を多様に作ることで、夜の歓楽街だけではなく、上野らしい文化資源をもっと体験できるエリアになれるはず」と話します。

調査を進めた結果、

上野には1ヶ所で完結しない回遊性の高さや、誰も滞り・体験できない文化資源が多数あることが見えてきました。上野スクエア構想では、これらの価値を「開放系の文化資源」と捉えること

としました。開放系の文化資源とは、日常的にアクセスでき、巡る楽しさを前提とした「接続性」、地元住



民が提供、もしくは来場者が参加可能なコンテンツがある「参加性」、一つの場所を色んな人が自由に楽しむことができる「多義性」、無料で参加可能かつすべての人に門戸が開かれて「無料性」、ゆ

っくり過ごしたり少し立ち寄りたりと滞在時間が多様な「選択性」の5つの特徴を持った、開かれた文化資源のこ

とです。

これらの5つの特徴を持つ文化資源を上野のまちなかで探していく過程で、「不忍池」「湯島天満宮」「広小路・御徒町駅前」「アーツ千代田3331」の4つのスポットに着目しました。そして、それぞれを頂点とし、かつ吹貫横丁と学問の道の2つの対角線が交差する、上野の山とは違った価値を持つまちなかのエリアが見えてきました。ひし形に囲まれたエリアを軸に上野のまちを見つめると、新たな上野というまちの姿「上野スクエア」が浮かび上がってきたのです。

新たな構想で 都市の将来像を描き出す

上野というまちが持つ豊かな文化資源を発掘しながら同時に上野というまちの生活圏を再構築していくこと。そこには、地元で商売を営む人、地元の大学や施設で関わる人、地元で暮らし生活を営む人など様々な立場の人たちと協力していきながら、

暮らしと文化が共存したあり方への変化でもあります。「上野スクエア」の輪郭とともに、上野というまちの生活圏としての価値を見直し、4つのスポットと2つの道が交わるエリアのなかに点在する様々な資源を巻き込んでいきながら、文化資源区の中心となる上野を再構築していくという方向性が、調査や委員との議論を経て確立されてきました。今後の上野スクエア構想の方向性について「まず是不忍池とその南側の仲町通りとの接続を生み出し、池とまちとの関係を新たにすることで、上野スクエア内における回遊性、楽し

しみ方にも変化が起きてくるはず」と中島さんは話します。今後は、開放系の文化資源の考え方をより強固にし、地域の豊かな文化資源が連携したエリアビジョンの提言へと動き出していきます。

上野スクエア構想は、

「構想」と名付けているように、新たな定義、新たなコンセプトのもとに都市の将来像をポジティブに描き出しているのです。東京文化資源区の中心である上野を軸に、各プロジェクトとも連動していきながら、東京文化資源区の豊かな文化を育む動きがますます活発化してきそうです。

(記事構成・江口晋太郎)



T-Cha NOW TOKYO PROJECT

東京文化資源会議では、民産官学の様々な分野の専門家や実践者が集い、
東京の各地域で育まれている様々な文化資源をハード面・ソフト面から活用するプロジェクトを推進しています。
ここでは、東京文化資源会議全体の動向や各プロジェクトの近況をお知らせします。



「地域文化資源デジタルアーカイブ」プロジェクトは、地域のコミュニティ資料、自治体関連資料、刊行物などをデジタル形式でアーカイブ化し、共有することを目的としています。第1期プロジェクト（2015年12月～2017年12月）では、地域雑誌『谷中・根津・千駄木』の記事と原資料を対象としたデジタルアーカイブを構築しました。

2018年1月からの第2期では、新たに「DA-Lab (Digital Archive Laboratory)」を開始しました。デジタルアーカイブを構築するための拠点、地域のなかに配置するという計画です。この拠点は、住民・自治体・民間事業者など多様な活動主体が、地域の情報をアーカイブするために利用できる予定です。ここで構築されるデジタルアーカイブ

デジタル
アーカイブの
活動主体どうしの
交流めざす
「DA-Lab」構想

ブは、地域のさまざまな活動のために活用されるときにも、その活動の主体どうしのコミュニケーションを活性化することに寄与すると期待しています。2018年6月現在、基本構想をまとめ、企画立案を行なっています。

満員御礼！
荒俣宏×神田明神
トークセッション

地図ファブプロジェクトは、三区文化資源地図協議会と共催して、地図からみる帝都物語と東京文化資源区連続トークセッション第1回「帝都物語からみる江戸・東京の風水」を2018年6月11日に開催しました。あいにくの雨模様にもかかわらず、満員のご来場、ありがとうございました。

帝都物語の作者・荒俣宏氏と神田明神権宮司・清水祥彦氏によるトークは、江戸・東京の都市の構造がどれほど風水の思想に基づいているのか、神田明神が地域に如何に愛されているのか、などの多岐の話題となりました。荒俣氏の博学で豊かな語りと清水権宮司の穏やかで心に染み入る語りは、精緻に絡み合う優雅な二重奏の様相を呈し、江戸・東京という都市を巨大なシンフォニーとして想起させるものでした。地図ファブでは、今後も第2回トークセッション、



完成披露シンポジウムとすめていきますのでご期待ください。

また、三区を対象とした地図のアーカイブも、利用者視点に立つて空間的なボードをなくした形で提供していきます。詳細は地図ファブのホームページをご覧ください。

多様な
精神文化が誕生
社寺会堂エリア
目に見える分析を
経て実践フェーズへ

湯島から上野にかけての一帯は、近代の精神文化が育まれた拠点ともいえる特別な場所。今も学術施設や宗教施設が多く集まり、各時代を物語るデザインや当時の最先端の技術を用いた建物が残されています。そんな地域のグローバルかつクロノロジカルな意義と可能性を多面的

に検討する「湯島社寺会堂」プロジェクト。

1年間にわたる検討会の成果として、中間報告書（「精神文化の新しい普遍性を求めて」）にまとめました。第2期をむかえた現在では、この成果を実践にうつすための事前準備を行なっています。社寺会堂をたよりに地域の特性を読み解くまち歩きや、大学の協力を進めるための模型作りを行なうとともに、新たな参加者を加えて議論の活性化を図りながら、ソフト面ならびにハード面のアイデアを実践へ繋げる仕組みを模索しています。

新プロジェクト
固定観念を打破
さらに進化す
る
Greater Aikiba

「オタクの街」。現在の秋葉原は、定着したイメージに引きずられてしまし、次の変化を迎えることが難しくなっているように思っています。「アキバプロジェクト」では、江戸時代以降の歴史や周辺の街との関わりという新たな視点から秋葉原を捉え直し、さらなる活性化を目指し活動を行なっています。

月1回の定例会議では、ステークホルダーや有識者を含めて様々なテーマで多角的に街を検討し、議論を深めています。今後は、2018年7月に、秋葉

原を中心として御茶ノ水・神保町も含む広域エリア「Greater Aikiba」についての街歩きガイドを発行予定。さらに、8月には定例会議での議論をもとに、今日に至るまでの「Greater Aikiba」エリアの変遷を辿るシンポジウムを開催予定です。



本郷の「キオク」と
「キロク」を
アーカイブする

旅館街や銭湯、学生街など、文京区本郷に根付くさまざまな文化資源を記録・維持しようと活動している「本郷のキオクの未来」。2017年度は、メインイベントとして老舗のご店主等をお呼びし、学生や地元住民の方とともにかつての本郷の様々な記憶をもう「本郷のキオク」を語り聞かす会2017」を実施しました。また、本郷の地域

コミュニティスペース「もりばあいのえ」の閉業をきっかけとして、周辺の街並みの記録を3Dスキャンや全天球カメラを中心に行いました。同時にここまで蓄積してきた「キオク」の発信にも力を入れ、本郷にかつてあった銭湯の記録本「菊水湯にありがとう」を発刊した他、文京建築会ユース企画の「歓迎！本郷旅館街展」への協力、「第3回文京映画祭」への特別上映作品の出品など、さまざまな媒体を通じて「本郷のキオク」が伝わるよう活動をしてまいりました。

2018年度も引き続きこうした活動をしていく予定です。まずは9月をめどに「キオク」を語り聞かす会」第2回開催に向けて計画中です。また、地域文化資源デジタルアーカイブプロジェクトとの協働で、掘りためきた本郷の様々な記録のアーカイブ化も進めてまいります。今後とも、皆様のご協力とご指導をお待ちしております。



プロジェクト
スクール@谷中
3年間のまとめ

2017年度、プロジェクト
スクール@谷中では、6月から
9月の3ヶ月間、全5回の講義
と実践編を実施しました。参加
者は、講義編、実践編合わせて
26名。実践編では「桜緑荘」「上
野桜木アトリエ」「デジタルア
ーカイブ」を題材とした小さな
プロジェクトを、すでに地域で
活動する人たちのサポートを得
ながら試行し、最終発表会には
地域住民も参加し、課題や今後
の展開についての意見交換を行
いました。

本年度は、3年間のプロジェ
クトのまとめとして、文化資源
区のまちづくりにおける「スク
ール」の機能の可能性を考える
機会を設けることを予定してい
ます。また、これまでのスクー
ルの実施を通じて得られた調
査・提案の成果や人的ネットワ
ークをもとに、谷中、根津、千
駄木、上野公園一帯の歴史文化
資源を生かすまちづくりに資す
る調査・提案活動へと展開して
いきます。

官民協働で
「歴史文化都市」
東京を目指す
まちづくり制度

歴史ある建物や町並みと暮ら
しの残るエリアを守り生かし、
磨くことは、今後の東京を持続
的な魅力、活力あるまちにする
ために不可欠な取り組みです。
地価が高く、開発インパクトや
防災課題の大きい東京でこれ
を実現するために、当研究会では
①ファンドなどの金融のしくみ
づくり、②都市再生特区による
容積移転や歴史まちづくり法の
適用、税制緩和のような都市計
画制度事業の適用による規制誘
導等、を組み合わせる検討を進
めています。

2018年3月には関東東北
で初めて、国土交通省のエリア
マネジメント型リノベーション
ファンド「谷根千まちづくりフ
ァンド」が民間都市開発推進機
構と朝日信用金庫の共同出資で
発足しました。一号案件として
谷中の古民家再生事業が進んで
います。街区単位のスタディと
しては神保町古書店街が存続で
きる更新案、都心部や臨海部の
開発などとバランスを取り、上
野谷中根津千駄木界限などを東
京の歴史文化ゾーンとして生か
す制度事業案などを検討中です。
2020年までには、官民協
働で東京を「歴史文化都市」と
して個性ある暮らしと文化を積
極的に活かせるまちづくりを目
指しています。

東京文化資源会議の
ウェブサイトが
リニューアルしました

生活文化資源や学術文化資源、
出版文化資源など、東京のもつ
様々な文化資源を活用していく
プロジェクトがこれまでに10以
上も立ち上がった東京文化資源
会議。多種多様な取り組みを網
羅的に情報発信すべく、本冊子
であるT-Chaのみならず、
ウェブサイトにおける情報発信
も強化しています。その一環と
して、6月1日にウェブサイト
(<http://tohun.jp>)をリニュー
アルいたしました。

東京文化資源区の概要、東京
文化資源会議の説明に加え、各
プロジェクトの概要紹介や進捗
のお知らせ、東京文化資源会議
の各種報告書やT-Chaなどの
発行物、各プロジェクト資料
などをアーカイブする項目など
を設置しました。今後は、各プ
ロジェクトの最新情報を定期的
にウェブサイトに掲載しつつ、
東京の文化資源の活用について
プロジェクトを横断しながら新
たな活用方法
を見出すため
の取り組みも
行っています。
2018年も、昨年
以上に活動の
幅を広げなが
ら、活動して
まいります。



編集後記

東京文化資源区の交差点とも言
える秋葉原。ついに秋葉原を対
象としたプロジェクトがその神
秘(?)のベールを脱ぎました。
空間的にも時間軸的にも、そし
て意味的にも、東京文化資源区
のバズルのピースが出揃ってき
たのではないのでしょうか。過去
から現在、そして未来を語る東
京文化資源会議にこれからも注
目です。(陸)

下町を歩くと、歴史的な建物や
文化施設が目がいきがちですが、
建物だけでなく、そこに住まう
人たちの生き生きとした様子に
いつも元気をもらっています。
古くからある商店や飲食店など、
街の文化の生き字引のような人
たちから、我々は何を引き継ぐ
ことができるか。東京文化資源
会議のみならず、日々の生活や
仕事でも意識していきたいもの
です。(江)

雨露に濡れる緑を眺めるのもな
かなか乙で、梅雨でもふと散
歩したくなります。東京文化資
源会議が創立して3周年。各プ
ロジェクトの成果や文化資源区
の魅力が、届くべきところに伝
わるよう、これからも地道に活
動を続けてまいります。(雅)

「ティーチャ」東京文化資源会議ニュースレター No.4

読み、旨み、味わいのある東京の文化資源的エキスを3ヶ月に一度、お届けします。

編集：東京文化資源会議広報委員会 デザイン：渋井史生(PANKEY inc.) 執筆：江口晋太郎(TOKYObeta Ltd.)、野口雅乃

写真：加藤甫 印刷・製本：スタート出版株式会社 発行人：東京文化資源会議 発行日：2018年6月30日

〒101-0054 東京都千代田区神田錦町2-1 TEL：03-5244-5450 FAX：03-5244-5452 MAIL：info@tohun.jp URL：http://tohun.jp/